

思想運動の組織方法について

我々の運動は一言で語れば我々の理想を具現化するための運動である。我々の理想を実現する主役は我々をも含めた大衆自身であること、換言するならば革命とは大衆自身の事業であることの確認の上に、我々の運動は形成される。従って我々の運動の位置はバクーニンの言葉をかりれば「革命の助産婦」ということにつきるのである。

1 革命の助産婦としての内部構造

我々は、我々の組織運動を形成するにあたって評議制組織原則を採用する。評議制組織原則とは一切の民主主義的組織原則及び全体主義的組織原則とは明確に異質なものである。即ち、 \wedge 多様の論理 \vee と \wedge 水準の論理 \vee との調和、直接民主主義なる \wedge 量の論理 \vee の否定、並びに全体主義なる \wedge 質の論理 \vee の否定による、固定化された指導機関を絶対に持たえない、多分に流動的なアミーバー的な組織構造なのである。まさしく我々は A H A \wedge 流動する根拠地 \vee として把握し、共に形成するのでなくてはならない。

具体的にそくして話しを進めよう。A H A の内的構造は現段階において、

総会—事務局—地区評議会—定期研究会等の編成を獲得する必要がある。即ち、まず総会は定期総会によって、できるかぎり長期の展望をもった一定期間の詳細な活動方針を決定すると同時に一切の必要な事項を決定しなければならないし、又事務局の編成を決定しなければならない。更に会員から要請のあった場合には直ちに臨時総会を開催し、要請された事項に関して決定しなければならない。総会が一日で終了しない場合には、連続して総会を続行し、あくまでも意志一致による決定を獲得しなければならぬ。勿論、何ら正当な理由なく欠席した者にはその時点で脱退勧告を決定し、本人の意志を確認しなければならない。総会是最も重要な実質的な場である。

次に事務局であるが、これは事務局員を選出しなければならないが、事務局が対外的には A H A の総体性を代理するものであり、内的には全体の状況を把握し適確な連絡、調整をになわねばならないからして、局員は一定の条件（時間・連絡等）をそなえていることが要求される。従って事務局員は通俗的な感情で選出されてはならない。

更に、地区評議会であるが、これは対外的にはやはり A H A の総体性（但し地区の）を代理するものであり、内的には A H A の各メンバーが日常的に緊密な連絡を保持し、共働していくための基本的な単位である。最後に定期研究会であるが、これは当面月二回、全員参加のもとに思想次元の質的深化をかつ質的均等性を獲得していくための場として設定されねばならず、定期研究会は条件のあるところから地区的なものとして形成されていかねばならない。あえて追記すれば、A H A の実体はあくまで個人の意志の集合を保証する各主体であることを確認しておく。以

上のことをふまえて総括的に言えば、革命の助産婦たるべき思想運動集團の内的構造は、組織方法としての反権力・絶対自由の質にある。確かにマラテスタの言をかりれば、「その目的は連帯であり、その方法は自由である。」そもそも官僚に必要な椅子を保持しないが故に、官僚になるうとする者が万一出たとしても、なれないということを組織的に保証する方法論なのである。ただ我々は指導を明確に必要なものとして把握しておかなければならない。即ち、全人格的指導者なるものを根底的に粉碎した地平に立って、我々は各個の課題それぞれについての指導性を、それ故に具体的な指導を認めるのではなくてはならない。それは相互批判と同じ水準の問題である。なぜなら指導はそれを拒否する者には絶対に指導にはなりえないものだからである。権力と指導はあくまで異質である。

2 革命の助産婦としての運動形成

我々の立場からする運動の形成とは、一言でいえば、思想運動と社会運動（大衆運動）との区別と連関の構造的把握に基づいた（大衆運動の自立）をめぐした闘いに対する、自己の二重性をふまえた上での支援（中軸）活動の形成ということである。

具体的に述べていくならば、まず、A H A 総会において決定した方針は現段階においては事務局の総合的な調整を参考にしつつ、各地区評議会、並びに各メンバーにおいてより現実的に緻密化した上で、それぞれの各地区高共斗並びに全斗委において提起し、大衆の検討を受ける中でヘゲモニーの貫徹を図っていくのである。あくまでも大衆運動の自立化

を推し進めるための思想運動であるのが A H A 運動であるが、それは単に観念上の問題にとどまることはできない。何故なら、実体を保持しない、つまり独自の現実行動をも展開することが出来ないならば、それは我々の運動が無力であること、オゾンビでしかないことを意味するからである。それでは A H A の独自の現実行動とは何か。それは大衆運動の自立化を推し進める過程での、大衆運動の防衛、つまりあらゆる敵権力からの防衛ということであり、この意味において明確に我々は思想的組織的に武装するだけでは不足であり、軍事的武装も又獲得されねばならないのである。思想的、組織的、軍事的武装は獲得することは我々の現在の課題であることを確認しよう。そして更には必要な斗争を独自でなうことも出来なければならないのである。即ち、大衆運動の質ではまったく取り組めない斗争をになわねばならない場合がそれである。この場合でも極力 A H A の名を直接的にあげることは避けなければならないのであって、可能な限り実行委、あるいは行動委等の形態で取り組む努力がなされなければならない。A H A が裸おどりをする時、それは現在の諸セクトのように末期症状であることを示す時なのである。

（一部省略）

II 資料 2 II

個別原点斗争の総括にあたって

1 個別原点斗争の意義

我々は個別原点斗争を第一義的な斗争として位置づけるが、我々にと

助産婦Vとの異質性は革命政府と労働者評議会との異質性である。

2 地区斗争との結合の意義

反帝社会斗争がそれ自身の質を獲得するためには、我々自身が日常生活構造の全領域における斗争を我々の運動構造として形成しなければならぬことを意味する。即ち地区斗争も又原点斗争なのであり、個別空間ではなく、地域社会空間における原点斗争なのである。この意味において我々は、個別原点斗争と地区原点斗争とを両方から二重に結合することによって反帝斗争を反帝社会斗争の質を創出し、獲得せねばならぬ。地区原点斗争が個別原点斗争と異なるのは、個別原点斗争が生産過程での斗争であるのに対して、地区原点斗争が消費過程での斗争であるという点である。従って個別原点斗争はその発展としての地区原点斗争を課題とせざるを得ず、この逆もまた課題とならざるを得ない。明らかに個別と地区の二つの原点斗争は、反帝社会斗争の水準において二重の結合を獲得しなければならない。この結合を欠落した一切の原点斗争は改良主義の限界を突破し、反帝社会斗争へと高まることができない。我々に要求されている反帝社会斗争とは八自警団Vに対決しこれを粉碎できる質をもった、個別と地区との二重の結合を基礎にした反帝社会斗争なのであって、いわゆる反帝政治斗争というようなアブク的、中央政治を頂点とした斗争ではない。反帝社会斗争の水準に立ってこそ、高校解体をめざした自主管理斗争を勝利への展望をもって推進することができるのであり、一切の諸個別斗争を総体性の内に位置ずけて闘いぬくことができるのである。従って斗争のシンボル操作は有害無益なものとは

ってこの斗争は反帝社会斗争の一環としての質を具現、発展していくものでなければならぬ。即ち、個別原点斗争を諸要求貫徹路線という自然発生性に拝跪した、大衆に追隨した斗争としてではなく、目的意識的な社会革命過程を創出していく反帝社会斗争の質を中軸として組織し、形成していくのである。しかしながら大衆自身が発現展開しうる質と、我々自身が創出しようとする闘いの質とは、全く異った位相にあるが故に、我々は大量自身の一切の斗争を支持しつつも、これらの斗争の限界を積極的に現実の斗争展開過程においてバクロ批判しつつ、大衆自身の意識の質、そして、その運動構造の質を不断に反帝社会斗争の地平へ押し進めるべく努力するのでなくてはならない。個別原点斗争はそれが個別原点での斗争であるという即自的な意味で意義があるわけではないが、又これを個別原点での斗争であるが故に、自然発生性を超克することができないときめつけられることも、政治斗争至上主義の誤った運動認識である。要は個別原点においてこそ目的意識的な闘いが貫徹されねばならないということなのであり、社会革命運動にとってこの闘いが第一義的なものであることは、政治革命運動と対比するとき明確である。即ち、我々の闘いは対政府斗争を頂点として個別斗争を組織するのではなく、全く逆に個別原点斗争をこそ頂点として一切の斗争を組織していくのである。ここに我々の運動とマルクス主義者の運動との根源的な異質性が明白に現われるのである。レーニンのソビエト論が大衆操作のため以上にものではありえなかったという事実は、明らかにその根拠をマルクスに負うものであり、所詮、マルクス主義者はジャコバン主義者であり、ブランキストと同じ穴のムジナなのである。革命の八前衛Vと革命の八

なり、反帝政治斗争のごとき斗争目標物（象徴）の選定は全く無意味なものとなる。この地平において軍事は軍事としての意義を獲得し、全斗争の前面へ押し出されるのである。反帝政治斗争の水準における軍事が、所詮、政治力学主義の変形にすぎないという現実を否定的に把握しつつなおかつ我々は、我々の反帝社会斗争路線によつた軍事的武装―総武装を自己の運動の射程内に見きわめておかねばならない。安易に武器を取る者はその武器によつて自己が粉碎されることを知らねばならない、又逆に武装を獲得する展望を持ちえない者はやはり自己を滅すのみである。思想的武装・組織的武装そして軍事的武装―総武装の下、総叛乱から反帝社会斗争を永続的に斗いぬき、世界社会革命へ原点における反帝社会斗争を頂点に、一切の斗争を組織し、発現・展開させねばならない。

（一部省略）

II 資料 3 II

地区斗争への課題

― 北部地区二校連絡会議アピール抜粋 ―

地区斗争が原点斗争と異なるのは、原点斗争が生産過程での斗いであるのに対して、地区斗争が消費過程での斗いであるという点である。従つて原点斗争はその発展としての地区斗争を課題とせざるを得ず、逆に地区斗争は原点斗争への発展を課題とせざるを得ない。明らかに原点斗争と地区斗争とは反帝斗争において二重の結合を獲得しなければなら

い。この結合を欠落した原点斗争は改良主義的経済主義の限界を突破しえないし、又地区斗争においても改良主義的政治主義あるいはせいぜい一揆主義の限界を突破することはできない。今、我々に要求されている反帝斗争とは八自警団Vに対決しこれを粉碎できる質をもつた反帝斗争原点と地区との二重の結合を獲得しうる反帝社会斗争なのであって、いわゆる反帝政治斗争のようなアブクの斗争ではない。それでは我々はかかる反帝社会斗争をいかにして形成し強化していくのか。それはまず第一に、今日の地区斗争の質を原点斗争と同じ質で斗うことをしなければならぬ。即ち、向う三軒両隣の斗い、日常生活構造内部での斗いを組織しなければならぬ。例えばステッカーを張るときコン泥的ではなく、一軒一軒張らせてもらうことを申し出て、当然出てくる様々な対応に対してこれを説得していくというような活動をこそ基本的なものの一つとして獲得していくことができなければならないであろう。そして第二には原点斗争を地区斗争へと向けるために、隣の机あるいは教壇との斗いを基礎にしつつ、教育矛盾を体制矛盾そして自己矛盾へと結合しうる批判的視点、反帝社会斗争の視座を理念的にはあれ理解させる諸活動を獲得せねばならない。かかる活動はピラと個人オルグといった旧来の形態から一步進めてテレビ育ちの高校生に浸透しやすい映画・漫画等を含めた集会を学内で幾度も獲得せねばならないであろう。以上のような多様な諸活動の上にたつてようやく原点と地区との二重結合を獲得しうる地平に立った反帝社会斗争を組織することが可能となる。この水準での斗争は個別を総体性の中で斗うことであるが故に、斗争目標物（象徴）の選定はある意味でどこでもよいものとなることができる。この

意味は極めて重要なことであり、ここにおいて八自警団▽に対決しうる
 ことができるのである。
 (一部省略)

— A H A 機関紙 —

九 六 戦 線

直接定期購読制ですので、
 300円(切手¥15×20)
 同封にて申し込んで下さい。
 書店には一切置きません。

II 参考文献から II

アナキズムの哲学	日・リード	法政大学出版局
もう一つの社会主義	ブーバー	理想社
抑圧と自由	ウエーユ	創元新社
革命について	アレント	合同出版
アナキズム		筑摩書房
反国家と自由の思想	大沢正道	川島書店
アナキズム叢書		三一書房
バクーニン	1・2	
クロポトキン	1・2	
ネットラウ		
プールドン	1・2	